S-5

地域における救急医療
中山間地域における庄原赤十字病院の現状と対策

庄原赤十字病院　院長

○中西（なかにし）　敏夫（としお）

現在、勤務医の過労、バーンアウト問題が大きく取り上げられている。その中でも医師に大きな負荷となっているのが救急医療であると考えられている。過重な負荷が医師の退職等につながり、さらに事態を悪化させている。小児科に関しては、特にその傾向が顕著であり、地域の救急医療の継続は全国的な重要課題である。当院では他の救急医療担当病院と同様に数多くの救急患者に対応しているが医師の勤労意欲の低下や小児科医の疲弊といった事態が発生しておらず、逆に若手の医師を中心に夜間、休日を問わず救急室に顔を出して自発的に協力しているという現状である。その点につき多少の考察を含めて報告する。

広島県は瀬戸内沿岸に開けた地域で二次医療圏は広島（8市町人口約133万人）、広島西（2市町、14.5万）呉（2市町28万）尾三（3市町27.3万）福山・府中（3市町51.5万）に対し県北部の備北圏域（庄原市、三次市人口10.2万）は人口が少なく高齢化率も高い。庄原市は面積1,246km 2（香川県の2/3程度）、人口約4.1万人、典型的な地方小都市である。市内に他の総合病院はなく、小児科、耳鼻科、皮膚科などの開業医もないため救急医療は初期から2次救急までほとんどすべて庄原赤十字病院（以下当院）が全面的に対応している。平成19年度の実績は救急患者総数11,109人でそのうちわけは、一般救急9,979人、救急車での搬送1,130人。そのうち小児救急受診者3,470人、小児の救急入院患者は114人であった。

医師33名で全面的に対応しており、ベッド満床時も含めて、全ての受診者を受け入れているが、特徴として以下の点が挙げられる。

① 小児科（2名体制）を除く、各科医師が順番に一人で全科当直を行っている。
② 小児科は原則セカンドコールであり、他科の当直医がまず診察を行う。
③ 各科の医師が毎月の各科医師待機表をもとに待機しており、常に専門医が支援するシステムである。
④ 当直回数は月平均2から3回であり、待機回数は各科の医師数により異なる。
⑤ 医師の50％は病院から歩いて1、2分の所に住んでおり、最も遠い医師も車で約5分以内にいる。
⑥ 看護師をはじめ、レントゲン技師、検査技師等が協力的であり、無駄な待ち時間が少ない。
⑦ 若手の医師は当院を希望して赴任するものが多くモチベーションが高い。
⑧ 人口のうち老人の割合が多く、救急患者も内科疾患が多いが、一般内科11名、循環器内科3名と、内科医の数が多く、医師一人当たりの負担が少ない。
⑨ 市内の救急病院は当院のみであり、患者は当院で必ず診療するという自覚が浸透している。
⑩ 住民が感謝の念をもっており、コンビニ受診も少ない。

当院の救急体制を維持するために、もっとも重要な点は全科一人当直を他科の医師が「何でもすぐ呼んでね」「遠慮する事ないから」などの姿勢で支えあう協力体制にある。外科系内科系等にわけて当直するよりも回数の少ない現状のほうが医師にも好評である。当直翌日の勤務は診療科の自主性に任せ、仮眠室での休憩や午後からの勤務免除などとし、医師一人の診療科（皮膚科、耳鼻科）は当直を金曜日など翌日の診療に支障がない日に設定している。

ほとんどの医師はいい経験ができたと喜んでおり、幸い、過去重大な問題は発生していない。

現在病院の官舎が老朽化しており病院に隣接する敷地にある宿舎をPFI方式で建設予定であり、居住環境の整備を図っている。